

論文

清浄プライミングおよび道徳的価値観が
道徳的自己へのアクセシビリティに及ぼす影響

浅野 龍平 浦 光博

The effects of cleanliness priming and moral value on the
accessibility of moral self

Ryouhei ASANO Mitsuhiko URA

論 文

清浄プライミングおよび道徳的価値観が 道徳的自己へのアクセシビリティに及ぼす影響

浅野 龍平* 浦 光博**

The effects of cleanliness priming and moral value on the
accessibility of moral self

Ryouhei ASANO Mitsuhiro URA

要 約

近年の研究から, 身体的感覚が自己概念に影響を及ぼすことが明らかにされている。清潔さの感覚は道徳性と関連することが指摘されており, 身体的な清潔さが道徳的判断に影響を及ぼす現象は清浄プライミングと呼ばれる。本研究では, 身体的な清潔さまたは汚染を想起させる文章を用いたプライミング手続きにより, 身体的清潔さの想起および個人の道徳的価値観が道徳的自己概念のアクセシビリティに及ぼす影響を検討した。実験の結果, 道徳的人生観が弱い群において清潔条件の方が汚染条件よりも道徳的自己のアクセシビリティが高く, 清浄プライミング効果が検出された。一方で道徳的価値観の強い群において清浄プライミング効果は認められず, これは清潔さの感覚的影響が道徳的価値観の高さによって促進されると仮定した仮説とは異なっていた。この結果から, 道徳的価値観の強さにより自己の道徳的側面についての判断を行う際の情報処理方略が異なる可能性が示唆された。

キーワード: 清浄プライミング, 道徳的人生観, 道徳的自己, 身体化された認知,
道徳的直観

* 追手門学院大学心理学研究科

** 追手門学院大学

背 景

我々は日常生活の中で数多くの出来事を経験し、その経験から自己の様々な側面についてのイメージが形成されていく。自己についての認識は、個人の動機付けや自己制御において重要な役割を持つ。道徳的自己についてのイメージもその一つであり、先行研究より道徳的アイデンティティの強さが向社会的行動の促進や反社会的行動の抑制、利他的行動への関与などを予測することが明らかにされている (Hardy & Carlo 2011; Hardy & Olsen, 2015)。

一方で、こうした自己イメージは固定的なものではなく、外的要因によって影響を受ける場合がある。感覚的要因による影響もその一つであり、例えば物理的な暖かさの感覚を経験することでより人格的に暖かいと判断される行動が促進されることや (Williams & Bargh, 2008)、清潔さの感覚が道徳的な自己イメージを介して道徳的判断の厳しさを強めることが明らかにされている (Zhong, 2010)。その理論的背景として、身体化された認知を基盤とする道徳的直感の理論が存在する。これは道徳的判断の研究において伝統的に重視されてきた熟慮的でシステマティックな過程だけでなく、直感的でヒューリスティックな過程の役割を強調する考えである (Haidt, 2001; Rozin et al., 1999)。道徳性と清潔さの概念が関連する理由として、汚染を忌避し清潔さを好む認知が社会的領域へと拡張されたことで、清潔さの概念が道徳性と結びつけられたという機序が想定されている (Chapman & Anderson, 2013)。

加えて、こうした感覚的要因が自己イメージのアクセシビリティに及ぼす影響は、個人が持つ道徳的価値観の強さによって調整される可能性がある。自己概念の構造は高度に体制化されており、特定の価値観を重視する個人にとってはその価値観と関連する情報は関連しない情報と比べて利用されやすくなる (Rogers et al., 1977)。したがって、道徳的価値観が強い個人においては、道徳的概念と関連した感覚的影響により道徳自己イメージのアクセシビリティが高まりやすいと考えられる。

これらのことから、道徳的自己イメージへの清潔さの感覚的影響について、道徳的価値観の強い群では弱い群よりも清潔さのプライミング効果が促進されると予測することができる。したがって本研究においては、道徳的自己イメージのアクセシビリティにおいて、清潔さの感覚的プライミングの影響と実験参加者の道徳的価値観の強さの関連を実験的に検討することを目的とする。プライミング手続きにおいては、先行研究 (Zhong, 2010) を参考に、身体的な清潔さを想起させるプライミング手続きを導入する。従属変数としては、Aquino et al. (2009) の手法を参考に、自己イメージの複数の側面における道徳的自己の順位を測定することによって、道徳的自己へのアクセシビリティの指標とする。道徳的価値観の指標としては社会規範に沿った生き方を志向する強さの尺度である道徳的人生観尺度 (辻岡・村山, 1975) を使用する。これらの方法を用いて、以下の仮説の検討を行う。

仮説 1 : 道徳的人生観と道徳的自己へのアクセシビリティが関連し、道徳的人生観の強い群では

弱い群よりも道徳的自己へのアクセシビリティが高くなるだろう。

仮説 2：プライミング条件と道徳的自己へのアクセシビリティが関連し、清潔条件では汚染条件よりも道徳的自己へのアクセシビリティが高くなるだろう。

仮説 3：プライミング条件と道徳的人生観の交互作用があり、道徳的人生観の強い群では弱い群よりも清潔条件の影響が強くなるだろう。

方 法

実験参加者

インターネット調査会社にデータの収集を依頼した。調査会社のモニター登録者700名（男性341名, 女性359名；平均年齢53.51歳, $SD=12.63$ ）のデータが収集された。

手続き

実験はインターネットを通じて行われ、実験参加者はPCやスマートフォン等の端末を使用して実験に参加した。課題はイメージ形成課題、道徳的自己認知測定課題、道徳的価値観測定課題から構成された。実験参加者は清潔条件あるいは汚染条件のいずれかにランダムに割り当てられた。イメージ形成課題は文章を使用して自己イメージの形成を行う課題であり、清潔条件と汚染条件の2条件であった。実験参加者は清潔条件、汚染条件のいずれかにランダムに割り当てられた。清潔条件では自分自身の身体が清潔である様子をイメージさせる文章が、汚染条件では自分自身の身体が汚れている様子をイメージさせる文章がそれぞれ提示された。その後、正確な自己イメージ形成が行えているかどうかを確認するため、イメージ想起課題を行った。これはプライミングしたイメージの利用可能性を高めるための操作として行われた（Markus & Wurf, 1987）。続いて道徳的自己認知測定課題では先行研究（Aquino et al., 2009）を参考に自己についての5つの側面の順位づけを行う課題を用いて道徳的自己へのアクセシビリティを測定した。最後に道徳的価値観測定課題を行った。

材料および変数

1. イメージ形成課題においては、実験参加者は「これから30秒間、画面に文章が表示されます。文章を読みながら、その内容のとおりのがあなたが鏡に映っていて、それを見ているかのように、できるだけ具体的に視覚的にイメージしてください」と教示され、続いて提示される文章を読んでそれを自分自身の事としてイメージする課題を行った。提示される文章は先行研究（Zhong et al., 2010）で使用された文章を日本語に訳して使用した。（a）清潔条件で提示された文章は「私の髪は清潔でさらさらしている。息はさわやかである。服は真新しく新品同様である。つめは切って磨いたばかりである。靴には汚れ一つない。私はとても清潔だと感じる」、（b）汚

染条件で提示された文章は「私の髪は脂ぎってべとべとしている。息はにおいがする。服には油のしみと汚れがびっしり付いている。つめには汚れがこびりついている。靴は泥だらけである。私はとても汚れていると感じる」であった。

2. イメージ想起課題においては、イメージ形成課題において形成したイメージを想起する課題を行った。実験参加者は形成したイメージについての3つの選択肢から適切な1つを選ぶ課題を5つ行った。例としては「あなたの髪は」という文に続いて清潔条件では「清潔である、整っている、乱れている」から、汚染条件では「脂ぎっている、整っている、乱れている」からあてはまる選択肢を選ぶ課題であった。

3. 道徳的自己測定課題においては、Aquinoら（2009）を参考に作成した自己イメージの順位づけ課題を用いた。自己のある側面を表す5つの語句である「道徳的な人」、「成功した人」、「家族の一員」、「自立した人」、「社会の一員」について、それらを「1位：自分自身に対する見方もっとも反映している」～「2位：自分自身に対する見方をもっとも反映していない」までの範囲で順位づけを行うよう教示した。道徳的自己認知を反映する「道徳的な人」の語句が選択された順位を道徳的自己へのアクセシビリティの指標として用いた。

4. 道徳的価値観の指標としては道徳的人生観尺度（辻岡・村山，1975）を使用した。尺度の項目数は12項目であった。項目は「世の中の秩序に従って生きたい」などの社会規範に沿った生き方を重視する傾向を測定する内容であり、得点が高いほど道徳的人生観を強く持つことを意味する。回答方法は1（反対）から5（賛成）までの5件法であった。

結 果

操作チェック

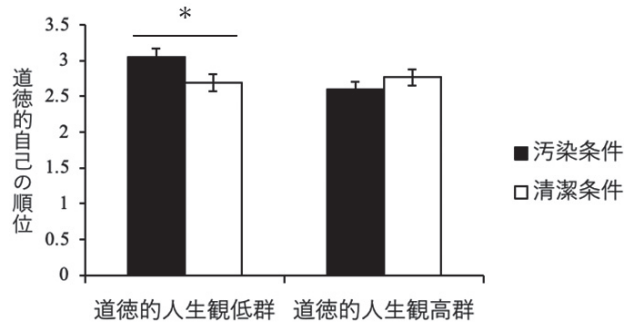
本研究では結果の分析においてHAD（清水，2016）を使用した。実験参加者が自己イメージを正確に形成できているかどうかを確かめるため、事件参加者ごとのイメージ想起課題における正答数を算出した。その結果、イメージ想起課題の成正答数について平均値は3.50、標準偏差は2.03、中央値は5.00であった。全ての設問に正答していた回答者は402名であり、以降の分析ではこれらの402名を対象とした。

道徳的自己へのアクセシビリティ

道徳的自己へのアクセシビリティの指標として、道徳的自己認知想定課題において測定された道徳的自己の順位を使用した。道徳的人生観尺度の逆転項目を処理し平均値を算出した尺度得点（ $M=3.55$, $SD=0.50$, 信頼性係数： $\alpha=.83$ ）を基に実験参加者を道徳的人生観高群（ $+1SD$ ）および低群（ $-1SD$ ）に分け、道徳的価値観の強さの指標とした。道徳的自己へのアクセシビリティにおけるプライミングと道徳的人生観の影響を検討するため、「道徳的な人」の順位を従属

変数とし、プライミング条件および道徳的人生観を独立変数とする2要因分散分析を行った。その結果を図2に示す。道徳的人生観 ($F(1, 398)=0.72, p=.40$) およびプライミング条件 ($F(1, 398)=2.80, p=.10$) の主効果は認められなかった一方で、道徳的人生観とプライミング条件の交互作用が認められた ($F(1, 398)=5.21, p=.02$)。道徳的人生観低群におけるプライミング条件の単純主効果の検定より、清潔条件 ($M=2.70, SE=0.12$) では汚染条件 ($M=3.05, SE=0.12$) よりも道徳的自己へのアクセシビリティが高かった ($t(398)=2.14, p=.03$)。道徳的人生観高群においては清潔条件 ($M=2.77, SE=0.12$) と汚染条件 ($M=2.60, SE=0.11$) に有意な差は認められなかった ($t(398)=-1.05, p=.29$)。

図2. 道徳的人生観およびプライミング条件ごとの道徳的自己の順位



注) エラーバーは標準誤差を表す。*: $p < 0.05$

考 察

本研究の目的は、本研究の目的は、道徳的自己へのアクセシビリティにおいて、清潔さの感覚的プライミングの影響と実験参加者の道徳的価値観の強さの関連を実験的に検討することであった。文章によるプライミング手続きを用いた実験を通して仮説を検討したところ、以下の結果が得られた。分散分析より、道徳的人生観の主効果が認められなかったことから、道徳的人生観の高さが道徳的自己へのアクセシビリティの高さに影響を及ぼすことを仮定したが仮説1は支持されなかった。プライミング条件の主効果は認められなかったことから、プライミング条件が道徳的自己へのアクセシビリティを予測することを仮定した仮説2は支持されなかった。プライミング条件と道徳的人生観の交互作用が認められ、道徳的人生観の弱い実験参加者では清潔条件において道徳的自己へのアクセシビリティが汚染条件よりも高まっていた一方で、道徳的人生観の強い群ではプライミングの影響は検出されなかった。この結果は、感覚的要因が自己イメージのアクセシビリティに及ぼす影響が個人の持つ道徳的価値観の強さによって調整される可能性を示すものである。しかしながらこの調整効果は、道徳的人生観の強い群では弱い群よりも清潔条件の影響が強くなるだろうとした仮説3とは対照的なものであった。

これらの結果から、仮説と異なり道徳的人生観およびプライミング条件の主効果が認められず、道徳的人生観の強い群で清潔条件における道徳的自己へのアクセシビリティの上昇は確認されなかった。また、感覚的要因が自己イメージのアクセシビリティに及ぼす影響が個人の持つ道徳的価値観の強さによって調整される可能性が示されたものの、本研究の予測に反し、道徳的人生観の強い群における清潔条件の効果は検出されなかった。その理由として、次の二つの可能性を上げることができる。

第一は、道徳的価値観の強い群ではプライミングによらず道徳的時自己へのアクセシビリティが高かったことで天井効果が生じ、清潔条件と汚染条件に差が生じなかった可能性である。

個人の価値観や態度の強さは関連した知識の利用頻度を高めることを通じてその知識は利用可能な状態で長期間維持されると考えられており (Higgins 1996, Krosnick & Petty, 2014)、実際に先行研究より、判断を行う対象への関心が高い個人においては、プライミング手続きによる介入による影響が検出されない場合があることが報告されている (Stroebe et al., 2008)。したがって本研究においても、道徳的人生観の高い参加者は低い参加者よりも自己イメージの順位づけ課題においてプライミング条件によらず道徳的自己イメージが同程度に利用可能であった可能性がある。

第二は、道徳的価値観の弱い群と強い群では道徳的自己についての判断において採用される情報処理方略が異なっていた可能性である。二重過程理論 (Stanovich, 1999; Kahneman, 2011) の観点から、人の情報処理は、ヒューリスティック処理を含む直観的な早い過程と、システムティック処理を含む熟慮的な遅い過程に大別されると考えられており、概念の活性化を介して生じるプライミング効果はヒューリスティックな処理を通じて生起するものと考えられている (Higgins, 1996)。それに加えて、遅い過程は早い過程へ介入する役割を持つと考えられており (Evans & Stanovich, 2013)、意思決定においてヒューリスティック処理よりもシステムティック処理が採用されやすい条件として、自己との関連性が高い対象に対する判断を行う場合が報告されている (Petty & Cacioppo, 1979)。したがって本研究においては、道徳的価値観の強い群では弱い群よりも、道徳的自己についての判断において直感的な判断よりも熟慮的な判断が促されやすかったことで、プライミングによる影響が生じにくかった可能性がある。

以上のことから本研究より、文章を用いた清潔さのプライミングによる道徳的自己イメージの活性化と道徳的価値観の強さの関連について、道徳的人生観の弱い群において清潔さのプライミング効果が認められることが示された。一方で、熟慮的な判断が行われた可能性がある道徳的価値観の強い群における道徳的自己へのアクセシビリティへの影響は検出されなかった。その理由として、道徳的価値観の強さによる道徳的自己概念の慢性的な活性化の上昇および道徳的価値観の強さの違いが道徳的自己に関する判断において利用される方略の違いが関与している可能性が示唆された。したがって今後の研究においては、道徳的価値観が強い群における道徳的自己イメージの活性化を測定することが可能な実験手続きの導入を検討する必要がある。そのため道

徳的自己へのアクセシビリティを反映する従属変数として、自己イメージの順位付けよりも感度の高い指標を用いることが考えられる。例えば反応時間を指標とするIAT (Greenwald, et al., 1998) といった手続きを用いて自己概念を測定することで、道徳的価値観の高い群における清潔さのプライミング効果を検出できる可能性がある。あるいは独立変数として文章以外の刺激を用いたプライミング手続きを行うことが考えられる。ソマティック・マーカー説によれば、熟慮を要する意思決定プロセスにおいても、それに先立つ身体状態の変化や感覚、情動などが手がかりとして寄与していると考えられている (Damasio, 1994)。したがって今後の研究においては、画像刺激などの身体的感覚や情動に働きかけることができると考えられる刺激を用いることで、道徳的価値観の強い群における自己イメージの活性化を検出することができる可能性がある。

引用文献

- Aquino, K., Freeman, D., Reed II, A., Lim, V. K., & Felps, W. (2009). Testing a social-cognitive model of moral behavior: the interactive influence of situations and moral identity centrality. *Journal of personality and social psychology*, 97(1), 123-141. <https://doi.org/10.1037/a0015406>
- Chapman, H. A., & Anderson, A. K. (2013). Things rank and gross in nature: A review and synthesis of moral disgust. *Psychological Bulletin*, 139(2), 300-327. <https://doi.org/10.1037/a0030964>
- Damasio, Antonio R. (1994). *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. Putnam's Sons.
- Evans, J. S. B. T., & Stanovich, K. E. (2013). Dual-process theories of higher cognition: Advancing the debate. *Perspectives on Psychological Science*, 8(3), 223-241. <https://doi.org/10.1177/1745691612460685>
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), 1464-1480. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.74.6.1464>
- Kahneman, D. (2011). *Thinking, fast and slow*. Farrar, Straus and Giroux.
- Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, 108(4), 814-834. <https://doi.org/10.1037/0033-295X.108.4.814>
- Hardy, S. A., Bean, D. S., & Olsen, J. A. (2015). Moral identity and adolescent prosocial and antisocial behaviors: Interactions with moral disengagement and self-regulation. *Journal of youth and adolescence*, 44(8), 1542-1554. <https://doi.org/10.1007/s10964-014-0172-1>
- Hardy, S. A., & Carlo, G. (2011). Moral identity: What is it, how does it develop, and is it linked to moral action?. *Child development perspectives*, 5(3), 212-218. <https://doi.org/10.1111/j.1750-8606.2011.00189.x>
- Higgins, E. T. (1996). Knowledge activation: Accessibility, applicability, and salience. In E. T. Higgins & A. W. Kruglanski (Eds.), *Social Psychology: Handbook of Basic Principles* (pp.133-168). The Guilford Press.
- Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 299-337. <https://doi.org/10.1146/annurev.ps.38.020187.001503>
- Petty, R. E., & Cacioppo, J. T. (1979). Issue involvement can increase or decrease persuasion by enhancing message-relevant cognitive responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37(10), 1915-1926. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.37.10.1915>
- Petty, R. E., & Krosnick, J. A. (2014). *Attitude strength: Antecedents and consequences*. Psychology Press.

- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. (1977). Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35(9), 677-688. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.35.9.677>
- Rozin, P., Lowery, L., Imada, S., & Haidt, J. (1999). The CAD triad hypothesis: A mapping between three moral emotions (contempt, anger, disgust) and three moral codes (community, autonomy, divinity). *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(4), 574-586. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.76.4.574>
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Stanovich, K. E. (1999). *Who is rational?: Studies of individual differences in reasoning*. Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Stroebe, W., Mensink, W., Aarts, H., Schut, H., & Kruglanski, A. W. (2008). Why dieters fail: Testing the goal conflict model of eating. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44(1), 26-36. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2007.01.005>
- 辻岡 美延・村山 繁 (1975). 価値観の六次元：因子的真実性の原理による尺度構成. 関西大学社会学部紀要, 7, 161-174.
- Williams, L. E., & Bargh, J. A. (2008). Experiencing physical warmth promotes interpersonal warmth. *Science*, 322(5901), 606-607. <https://doi.org/10.1126/science.1162548>
- Zhong, C. B., Strejcek, B., & Sivanathan, N. (2010). A clean self can render harsh moral judgment. *Journal of Experimental Social Psychology*, 46(5), 859-862. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2010.04.003>